

青山学院女子短期大学60年史の基礎的研究

清水 康 幸

本プロジェクトは、次のような目的と課題意識のもとに2013年度より出発した。

「本学の60余年の歩みは、そのまま日本の短期女子高等教育の歩みと重なる。また本学はキリスト教信仰にもとづく全国区の大都市型短期大学として、ユニークかつ独自の位置を占めてきた。本学の歴史については、本研究所プロジェクトにおいても何回かの調査研究が行われてきた。これらの蓄積をふまえ、60年史を編纂する時機が到来したと考えられる。本プロジェクトは、25年史、50年の歩み、さらに研究所プロジェクトの成果の上に立ち、60年史編纂の基礎作業を行うものである。」

このように、本プロジェクトは本学の「60年史編纂」の基礎作業という性格を持つため、その運営も「青山学院女子短期大学60年史編纂委員会」（2013年3月発足、委員長は学長）の活動と表裏一体の関係を持って進められてきた。この編纂事業は教授会および学院の管理委員会の承認を得て発足したもので、さらに「60年史編纂」という事業名は2014年度からは「65年史編纂」と変更して今日に至っている。

メンバーは、所員4人（清水康幸／谷本信也／菅野幸恵／山田美穂子）ならびに客員研究員1人（佐々木竜太・青山学院教育人間科学部助教、現在は清和大学短期大学部）によって開始され、また編集補佐の2人（山崎奈々絵・聖徳大学／田中智子・立教大学）の協力を得て、日常の研究活動を行ってきた。また金智恩氏（お茶の水女子大院生）には資料整理のアルバイトをお願いしてきた。

研究活動は、大きくは研究会と講演会に分けることができる。

研究会活動は2年間を通じて15回にわたって行われた。内容的には、①本学に関する過去の研究からの学習。具体的には『青山学院女子短期大学の歩み』（1975年刊）や本件研究所年報17号（2010.3刊）におけるプロジェクト「青山学院女子短期大学の歴史と現在」の諸研究、同年報10号（2002.12刊）におけるプロジェクト「女子大学寮に関する心理学的・歴史的研究」の諸研究等を検討してきた。②「65年史」の編集方針の検討、目次や執筆分担の確認、「資料編」の内容構成に関する検討、刊行に至るスケジュールの検討等、「60年史」編纂に関わる論点、さらに本プロジェクトの執筆構想の発表と検討、等を行ってきた。

講演会については、合計6回行った。まず、井上恵美子氏（フェリス女学院大学教授）「フェリス女学院150年史資料集編纂の経験から」（2013.7.12）、湯川次義氏（早稲田大学教授）「大学史沿革史の記述内容について－『青山学院女子短期大学60年史』に期待するもの－」の2回は、他大学の年史編纂事業から学ぶことを目的としたものであ

る。次いで、名誉教授や元学長から体験談を伺うこととし、田島俊雄名誉教授「芸術学科創設の頃」、阿部幸子元学長「教員・学長時代の回想」、前之園幸一郎元学長「学長時代の回想」、前園主計名誉教授「将来計画委員会と総研設立の頃」といった4回の連続講演を行ってきた。

以上の経過を経て、以下の7点をプロジェクトの研究成果として報告する。

- ①山田美穂子「明治日本における女子教育とキリスト教教育の試みの一例：女子学院の歩み」
- ②田中智子「『青山学院女子短期大学新聞』にみる学友会－敗戦直後から1960年代を中心に－」
- ③佐々木竜太「青山学院女子短期大学におけるアドバイザー・グループ制度の歴史的変遷と特徴」
- ④菅野幸恵「『卒業生調査』からみる学生生活」
- ⑤山崎奈々絵「創設期の青山学院女子短期大学児童教育科の理念とカリキュラム－保育者養成の観点から－」
- ⑥谷本信也「青山学院女子短期大学入試制度の歴史」
- ⑦清水康幸「短大・大学の『統合化』問題をめぐる経過と論点」

山田論文は、もともと本学の宗教活動やキリスト教教育を描くのが課題であったが、今回は同じくキリスト教系の学校である女子学院について、その創立から大正期あたりまでを対象時期として、本学のキリスト教教育との比較のための基礎的作業を行っている。

田中論文は、戦後の本学の学生自治組織である「学友会」の出発とその後の組織改編について、『青山学院女子短期大学新聞』の記事を中心素材に明らかにしている。短大発足後の学友会活動、1960年代以降の組織改革の変遷などが述べられている。

佐々木論文は、本学の学生指導の大きな特徴である「アドバイザー・グループ制度」の発足から今日に至る変遷をたどり、その過程で生じた何度かの制度改正、それぞれの時期の学生の意見や教授会での議論などを丹念に明らかにしている。

菅野論文は、以前のプロジェクト（年報17号参照）において行った卒業生アンケート（2007～2008年実施）の未分析部分から「学生生活」に関する内容を分析したものである。

山崎論文は、1962年創設当初の児童教育科（のち児童教育学科）の理念とカリキュラムの特徴を明らかにしている。こうした特徴は今日の子ども学科にも継承されている。

谷本論文は、本学における入試制度の変遷を通史的に明らかにしたものである。初期の過渡期を経て1960年代以降80年代までは3科目の一般入試をメインとする入試形態が定着していたが、90年代以降は特別入試の種類を大幅に増やし、2000年代以降はさらに入試形態が多様化していったこと等を、豊富な資料と共に明らかにしている。

清水論文は、2005年に理事長・院長から大学長・女子短大学長宛に出された「統合化」の具体案を求める諮問をめぐり学院・大学・女子短大の対応とその帰趨をたどっている。